

# 東京都スポーツ振興審議会（第29期第10回）

日 時：令和7年11月28日（金）午後3時00分

会 場：東京都庁第一本庁舎42階北側 特別会議室A

午後 3 時00分開会

○石原企画調整担当部長 ただいまより、第29期第10回東京都スポーツ振興審議会を開会いたします。

本日は、大変お忙しいところご出席をいただきましてありがとうございます。

スポーツ推進本部企画調整担当部長の石原でございます。議事に入りますまでの間、私が進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

ゆもと委員につきまして、参加が遅れるとのご連絡をいただいておりますが、後ほどお見えになるため、本日、16名の委員の皆様にご出席をいただくこととなります。

東京都スポーツ振興審議会に関する条例第7条第1項に基づく開催に必要な定足数である半数に達しておりますことをご報告申し上げます。

また、今回の審議会から委員の交代がございましたので、ご紹介させていただきます。

内山 真吾委員でございます。

○内山委員 内山です。よろしくお願ひします。

○石原企画調整担当部長 桐山 ひとみ委員でございます。

○桐山委員 桐山ひとみです。よろしくお願ひいたします。

○石原企画調整担当部長 また、本日は、ご欠席ですが、日の出町長の改選に伴い、田村委員から東亨委員への交代がございましたので、ここでご報告をさせていただきます。

本日の委員の皆様のご出席状況につきましては、お手元の委員名簿に記載してございますので、そちらをご覧ください。

続きまして、本年4月にスポーツ推進本部が設置されたことに伴い、幹部の人事異動がございました。ご紹介させていただきます。

本部長の渡邊 知秀でございます。

技監の朝山 勉でございます。

スポーツ総合推進部長の小池 和孝でございます。

国際スポーツ事業部長の梅村 実可でございます。

スポーツ施設部長の澤崎 道男でございます。

それでは、スポーツ推進本部長、渡邊より、一言ご挨拶申し上げます。

○渡邊スポーツ推進本部長 スポーツ推進本部長の渡邊でございます。

本日は、お忙しい中、第29期第10回東京都スポーツ振興審議会にご出席いただき、誠にありがとうございます。

会議に先立ち、一言ご挨拶申し上げます。

今回は、本年4月にスポーツ推進本部が設置されて初めての審議会でありますとともに、第29期の最終回でございます。本日は、委員の皆様方から、今期を振り返っての総括をいただければと思っております。

第29期では、東京都スポーツ推進総合計画の改定について、1年以上にわたり、ご議論をいただきました。いただいた答申を踏まえ、次の6年間を見据えた総合計画を策定することができました。また、9月には、世界陸上、今月には、デフリンピックを開催いたしました。両大会とも、多くの方々にご観戦もいただき、スポーツが持つ力やその魅力を改めて認識いただけたかと思えます。審議会委員の皆様方にも、お忙しい中、様々な形でご協力いただくとともに、視察にもご参加いただきました。誠にありがとうございます。おかげさまで、約5万人の子供たちをはじめ、約28万人の方に実際に会場に足を運んでいただくとともに、デフリンピックに関する様々な情報発信を行うデフリンピックスクエアにも、約5万人の方にお越しいただくなど、デフリンピックがかつてないほど盛況な中、幕を下ろしました。また、世界陸上についても、連日満席になるなど、二つの機会を非常に有効に生かせたと思っております。

スポーツ推進本部では、世界陸上、デフリンピックのレガシーを継承しながら、新たなスポーツ推進総合計画の下で、誰もがスポーツを楽しむ東京の実現を目指し、スポーツを通じて一人一人のウェルビーイングを高めていけるよう、より一層スポーツ施策を推進してまいります。第29期の委員の皆様方へは、これまでのご尽力に改めて御礼申し上げますとともに、都のスポーツ施策の推進のため、今後も引き続きお力添えを賜りたく、よろしく願いいたします。

それでは、本日もどうぞよろしくお願い申し上げます。

○石原企画調整担当部長 次に、資料のご案内をさせていただきます。

本日、議事で使用いたします資料は、お集まりの皆様には、お手元のタブレット端末に、オンラインでのご参加の皆様には、画面上に映してご説明いたします。

タブレット端末につきましては、画面をタッチいただくと、右上に「同期」「非同期」のボタンが表示されます。現在は「同期」状態となっており、説明に合わせて、画面が自動的に切り替わります。

「非同期」を選択いただきますと、説明とは別に、ご自身の操作で資料をご覧いただくことが可能です。その際、右下に表示されます「発表する」「退席する」のボタンは

触れないようお願いいたします。資料をご覧いただいた後は、「同期」状態に戻していただきますようお願いいたします。

なお、横長の資料につきましては、タブレットを横向きにしていただくと、資料を大きくご覧いただくことが可能でございます。端末操作について、ご不明な点がございましたら、お近くの職員にお声がけください。

オンライン参加の委員の皆様につきましては、事務局で資料を映しますので、そちらをご覧いただければと思います。

なお、本日、お集まりの委員の皆様の上には「次第」、「東京都スポーツ振興審議会第29期委員名簿」、「座席表」がございます。

資料のご案内は、以上となります。

続きまして、本日の次第ですが、報告案件3件、審議事項1件の順に進めてまいります。報告事項は「東京2025世界陸上競技選手権大会の開催報告」、「第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025の開催報告」、「第39回全国健康福祉祭（ねんりんピック）東京大会の基本構想（素案）について」の3件です。

また、審議事項は「第29期東京都スポーツ振興審議会の総括」についてでございます。

それでは、ここからは松尾会長に進行役をお願いいたします。

○松尾会長 皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました松尾でございます。

このたびの世界陸上では、子供たちが、実際に選手たちが走るトラックを一生懸命走っている姿が、私の目に焼きついており、すばらしい取組だなと思いましたし、なりより今回のデフリンピックは、成功といえましょうか、本当の大成功だったと、私は思います。1924年に始まってからちょうど100年目の節目にあたる、第25回大会において、最高、最大の大会になったのではないかと思いますし、後ほど出てくるかと思いますが、「する・みる・支える」に加えて、今回「応援する」というキーワードについて、これからの東京のスポーツ推進を進めていくにあたって、この「応援する」がうねりとなって、約33万人の皆様方が、約5万人の子供たちも応援して下さり、この応援が、新しいスポーツの在り方を示して下さったと思います。同時に応援することを通して、いわゆる障害がある、ないなどということの理解といえましょうか、障害の理解というだけではなく、デフスポーツの価値をしっかりと伝える機会になったのではないかと思います。これは、こうした大会になったのではなく、まさにこうした大会にさせていただいた、導いていただいたと、私は、これが成果だと思っているところでございます。まさに一

昨日閉会したばかりで、今日は一番お疲れのところかと思いますが、審議会を代表いたしまして、心から感謝申し上げたいと思います。本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

それでは、次第に従いまして、議事を進めさせていただきたいと思います。

初めに、今申し上げたことも含め、3件の報告事項につきまして、事務局よりご説明をお願いいたしたいと思います。お願いします。

○石原企画調整担当部長 それでは、「東京2025世界陸上競技選手権大会の開催報告」、「第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025の開催報告」、「第39回全国健康福祉祭（ねんりんピック）東京大会の基本構想（素案）について」の3件につきまして、続けてご説明させていただきます。

○中山国際スポーツ事業部事業調整第一課長 それでは、報告事項「東京2025世界陸上競技選手権大会 開催結果（概況）」について、私、中山からご説明をさせていただきます。

お手元の資料1をご覧ください。

はじめに、「1 大会概要」でございます。

主催、運営組織のほか、開催期間、会場など、大会の基本事項を記載しております。今大会は、193の国と地域及び難民選手団から選手1,992名の参加がございました。

続きまして、「2 主な大会成果」でございます。競技記録やチケット販売枚数など、大会の成果を記載しております。入場者数に関しては、約62万人となりまして、国内で開催された過去2回の大会を超え、最多の入場者数となりました。また、SNS掲載動画再生数が約7億回となるなど、国内外から大きな注目を集めました。

続きまして、「3 主な都の取組等」でございます。東京都では、令和4年12月に「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」を策定いたしまして、令和5年2月に、世陸・デフを通じて、目指す姿をビジョン2025として取りまとめをさせていただきました。さらに本ビジョンの実現に向けたアクションブックを策定、更新いたしまして、これらに基づき様々なプロジェクトを実施してまいりました。

はじめに、「国内外への発信」についてでございます。大会期間中に、都立明治公園など国立競技場周辺で、盛り上げイベントを実施いたしまして、10万人を超える方にご来場いただきました。また、訪日海外メディアを対象としたメディアツアーを実施いたしました。

次に、「子供たちの参画」についてでございます。大会開催前には、都内の小学4年生から6年生へのスポーツドリルの配布や、都内全小学校へのリレー競技用バトンの配布など、事前に陸上競技に触れてもらえる取組を進めさせていただきました。さらに、開催期間中は、都内及び被災地の子供たちを観戦に招待いたしまして、臨場感あふれる会場でスポーツのすばらしさを体感いただきました。

冒頭、松尾会長からご紹介いただきましたとおり、期間中の国立競技場におきまして、世界陸上リアル教室と題して、約3,000名の小学生にトラックでの短距離走体験を行っていただきました。また、そうした現地での参加が困難な重度障害のある子供たちには、分身ロボットの遠隔操作による、トラック走行などを体験いただきました。こうした子供の参画に対する都の貢献に対しまして、WA（ワールド・アスレティックス）から表彰をいただくことができました。

持続可能な大会運営への取組についてでございます。持続可能な航空燃料SAFの原料となる家庭の廃食用油の回収キャンペーンを、アスリートなどの協力を得て実施いたしました。さらに、暑さ対策としまして、クーリングスポットの設置やスタートアップ事業者との連携など、様々な取組を行わせていただきました。

「多様な人々の参画」についてでございます。ボランティアにつきましては、年齢や国籍、障害の有無にかかわらず、2,858名の方々に、多くの現場でご活躍いただきました。また、大会の気運を盛り上げる前夜祭といたしまして、廃線となったKK線（東京高速道路）でランニング体験イベントを開催いたしまして、2,283名の方々にご参加いただきました。

最後となりますが、「4 今後の取組」といたしまして、世界陸上財団における大会報告書の作成や、東京都による世界陸上・デフリンピックの取りまとめを、現在、進めております。

報告は以上となります。よろしくお願いいたします。

○金谷国際スポーツ事業部事業調整第二課長 続きまして、「第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025 開催結果」をご説明させていただきます。

事業調整第二課の金谷でございます。よろしくお願いいたします。

まず、資料上段をご覧ください。

「1 大会概要」でございます。11月15日から26日まで21競技、3,081名の選手がエントリーをし、大会が開催されました。実際の選手の参加は、約2,800名でございまし

た。

続きまして、中段でございます。「2 主な大会の実績」でございます。日本は、過去最多、51個のメダルを獲得しました。また観客入場者数は、競技会場、デフリンピックスクエア合わせまして約33万人と、多くの方々にご来場をいただいております。

次に下段の「3 主な都の取組等」でございます。まず、はじめに大会のプロモーションでございます。都庁のプロジェクトマップやJR東日本の3路線において、車体広告を実施いたしました。大会直前には、多くのメディアに大会を知っていただけるよう、プレスセミナーを開催したほか、大会期間中には、記者会見、メディアツアーなども実施をしております。

続きまして、次ページをお願いします。

子供たちの観戦でございます。都内の小中高生等約5万人が参画をし、ハンドブックなどによる事前の学習、当日の競技観戦に加えまして、表彰式のトレイベアラーなどの運営体験も実施をしております。

次に、下段のユニバーサルコミュニケーション技術の活用でございます。デフリンピック史上初めて、UC技術を活用し、選手・観客への情報保障を充実しました。また、競技音を視覚で体感できる「ミルオト」、解説をリアルタイムに字幕化するスマートグラスなどの技術を競技観戦で活用しております。

また、「オールウェルカムTOKYOデフ・スペシャル」としまして、街中でもUC技術を活用したおもてなしを展開するとともに、デフリンピックスクエアでも、UC技術のショーケーシングとして「みるTech」を開催いたしました。

次ページをお願いいたします。

次に、多様な人々の参画でございます。

会場では、メダルセッションを中心に、ろう者やデフアスリートと開発した、視覚的に応援を届けることができる「サインエール」で、選手の活躍を後押ししました。ボランティアでは、年齢や国籍、障害の有無にかかわらず、多様なボランティアに活動していただきました。

また、大会期間に合わせて開催しましたパラスポーツ普及イベントには、約13万人に来場していただきまして、スポーツの体験、デフアスリートとの交流など、大会の盛り上げにつなげてまいりました。

さらに、会場に来られない、会場での現地観戦が困難なの方々には、分身ロボットを活

用して参画してもらう取組を行いまして、14施設、218名に参加してもらったところでございます。

ご説明は以上でございます。

- 黒田スポーツ総合推進部連携推進担当課長 続きまして、「令和10年度に開催する第39回全国健康福祉祭（ねんりんピック）東京大会の基本構想（素案）について」、私、黒田よりご説明させていただきます。

ねんりんピックは、60歳以上の高齢者を中心としたスポーツや文化、健康と福祉の総合的な祭典で、昭和63年の開始以来、毎年各県の持ち回りで開催されています。

全国の都道府県及び政令市から、60歳以上の選手、役員約1万人が参加され、令和8年度の埼玉大会に続き、令和10年度に東京で初めて開催されます。

区市町村は、競技・文化団体とともに、競技・イベントなどを運営し、都道府県は、開閉会式などの式典や美術展、音楽文化祭などのイベントを開催するほか、選手の宿泊輸送、医療などを担います。

次ページをご覧ください。

このたび、大会目標や概要、事業体系などについて、外部有識者等の意見を踏まえ、基本構想（素案）として、公表いたしました。基本方針では、「高齢者の未来像を示す」、「東京の強みを活かす」、「誰もがいつまでも輝ける成熟都市の実現」といったキーワードを掲げ、大会目標として「心身の健康」、「つながりの創出」、「先端技術の活用」、「東京の魅力発信」、「レガシーの継承・発展」の5つの柱を設定いたしました。

大会名称は「第39回全国健康福祉祭東京大会」、愛称は「ねんりんピックChoju東京2028」、大会テーマは来月12日（金）まで募集いたしまして、今後、決定いたします。委員の皆様におかれましても、是非、ご応募いただけますと、幸いです。

大会の会期は、3年後の令和10年11月3日（金）から6日（月）までの4日間、マスコットキャラクターは、2013年の東京国体で誕生しました、東京都スポーツ推進大使である「ゆりーと」といたします。

総合開会式は、京王アリーナTOKYO、総合閉会式は、東京国際フォーラムで実施いたします。あわせて、美術展や音楽文化祭などの文化イベントも開催いたします。

また、区市町村が実施する交流大会といたしまして、既定の10種目である「スポーツ交流大会」、誰もが親しみやすい種目を中心とした「ふれあいスポーツ交流大会」、将

棋や健康マージャンなどの「文化交流大会」、計34種目を都内37自治体で開催を予定しています。このほかにも、各自治体で様々な協賛イベントを実施し、東京都全体で大会気運を醸成いたします。

今後の予定といたしまして、大会開催までの計画・準備のスケジュールを示しております。令和10年度の開催に向け、関係者と連携して計画準備を進めるとともに、大会気運の醸成を図ってまいります。

「交流大会の実施区市町村」の一覧を参考としてお示ししております。太字で記載した4種目につきましては、東京大会で初めて開催いたします。なお、今回公表した基本構想（素案）は、本日の資料としても添付してございますので、後ほどご覧いただけますと幸いです。

説明は以上です。

○石原企画調整担当部長 報告事項の説明につきましては、以上でございます。

○松尾会長 ありがとうございます。

ただいま事務局よりご説明をいただきました報告事項につきましては、後ほど審議事項とあわせてご意見を頂戴できればと思いますので、そのときよろしく願いいたします。

それでは、ここから審議事項に移りたいと思います。

「第29期東京都スポーツ振興審議会の総括」について、事務局よりご説明をお願いいたします。

○平野スポーツ総合推進部企画担当課長 それでは、本日の審議事項について、ご説明いたします。

資料の4をご覧ください。

本日は、第29期の最終回ということで、今期の審議会での議論等を振り返っていただきながら、ご意見をいただければと考えております。

資料にありますとおり、第29期は、まさに「東京都スポーツ推進総合計画」の改定の期と言えまして、1年以上かけて議論を重ね、本年3月に新たな計画を公表したところでございます。

また、9月に世界陸上、11月にデフリンピックという二つの国際大会を東京で開催し、先ほど開催結果をご報告させていただきましたが、委員の皆様には、視察にもご参加いただき、都の取組についてもご紹介させていただきました。

こうしたことを踏まえ、本日は、新たな計画のもと、今後の都のスポーツ施策に期待すること、あるいは、ご視察いただいた世界陸上やデフリンピックについて、お感じになったことや、今後の国際スポーツ大会に期待することなど、幅広くご意見をいただければと思っております。

簡単でございますが、審議事項についてのご説明は以上となります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

○松尾会長 ありがとうございます。

それでは、これまでの報告事項や審議事項の説明を受けまして、皆様方からのご発言をいただければと思います。

ご発言に当たりましては、私からお名前をお呼びいたしましたら、目の前のマイクの右側のボタンを押していただきまして、マイクをオンにいただいた状態でお話をいただければと思います。

ご発言後はもう一度そのボタンを押していただきますと、マイクがオフになります。

オンラインでご参加いただいております委員の皆様方におかれましても、私がお名前をお呼びした後に、お話しいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、本日、今のお話がありましたように、この第29期を振り返っての総括という点でございまして、同時に、先ほどご説明があったとおり、世界陸上やデフリンピック、あるいはねりんピックへの今後について、二つの大会については感想も含めて、また、ねりんピックについては今後の期待も込めて、そして、今後スポーツ推進計画を本当に地に足をつけて実施していくには、どんなことを考えなければならないのか、あるいはこういうことを行ってほしいという期待も含め、お話をいただければ有難いと思います。

お一人ずつ10分も20分もお話を聞きたいところでございますが、少し時間的な制限もあるため、今日は、一人当たり5分ぐらいのところでお話をいただければ幸いです。

最初に、小淵委員からお話をいただければと思いますが、小淵委員は、先ほど聞きましたら、デフリンピックにはボランティアとして参加をされたということでございます。では、小淵委員からお願いします。

○小淵委員 小淵です。

この第29期はずっとトップバッターで発言をさせていただいていたかと思えます。改めて総括になりますが、まず、計画策定に当たっては、私も好き勝手発言をさせていた

だいたというのもあるので、きちんとその発言の意図を含めて、都の皆様が丁寧に聞き取ってくださって、それを計画に反映して下さったことについて、改めて感謝申し上げます。

私は、パラスポーツの振興の視点で、コメントをさせていただいておりますが、この計画自体、やはり全方位的に、ほかの都道府県にも参考になるような計画だなど、改めて思っております。当然、拠点となるパラスポーツセンター、北区と国立市にあるセンターをはじめ、それらを拠点にしながら、都内の公共スポーツ施設で、きちんと障害者の受入れを進めていくことも計画に記載されており、こうしたことがきちんと進んでいくことが、これから非常に大切になってくるだろうし、私自身も注視していきたいなと思っております。

1点、今後、これは、私自身の宿題でもあるのですが、この公共スポーツ施設における障害者の受入れに関しては、ある程度可視化していくことが、次のステージかなと思っております。これは、今回の第29期の計画策定するときにも発言をさせていただいておりますが、なかなか難易度が高いということも、重々承知しております。この公共スポーツ施設における障害者の受入れについての可視化など、評価指標というものをつくっていくことも、今後私自身も考えながら行っていきたいなと思っております。

最後に、デフリンピック、先ほど松尾会長からも、ボランティアという話がありましたが、ボランティアとして今回関わらせてもらいました。私自身は、バレーボール会場のボランティアをさせてもらいました。最初は、選手団が駐車場に来たのを受入れ、控室まで案内するというのを、選手団が到着するたびに行っていました。最後の日は、入口付近での受付業務ということで、来場者をカウントしたり、あふれる来場者調整をしたりしておりました。バレーボール競技の初日は、恐らくそんなに人が入ると、皆様、想像していなかったと思うのですが、実際に開場したら満席で、初日は立ち見が出て、その上で、会場の外に長蛇の列ができていて、私が想像していた以上の光景をみることができて、うるうるしながらボランティアをしておりました。翌日からは入場制限をして立ち見はなくなりましたが、それを含めて今回のデフリンピックは非常にいい意味で裏切られたなと思っておりますし、これをきっかけに、先ほど松尾会長もおっしゃいましたが、デフスポーツの振興もそうですし、パラスポーツ、障害者のスポーツにしても、こういったことをきっかけにしながら、根づいていくのが理想だと思いますので、その辺を私自身は注視していきたいなと思っております。

以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。

今、公共スポーツ施設の可視化という問題がありましたが、可視化をする上でのポイントをあげるとすると、先ほど評価指標というご発言もありましたが、何かご提案いただけるかと有難いです。

○小淵委員 これは、今、私自身も研究をしているところなのですが、当然、障害当事者によって、また障害の種類によって、それぞれ違うと思います。その方々が、自分の障害であれば使いやすい、自分の障害ではその指導ができる指導者がいない、ハード面で難しいなど、いろいろあると思います。ある程度行く前に可視化されていると、私はこの施設は使えるけど、あそこの施設は使えない、もちろん、全部が使えるのが理想なのですが、まずは可視化をしながら、徐々に全部使えるようになっていけばいいのかなどいうのを含め、当事者の方が使いやすいといった、行く前に分かるような指標ができるといいのかなと思って、今、漠然と考えております。

○松尾会長 ありがとうございます。大変貴重なご意見だと思います。

それでは、二條委員から、ご発言いただけますか。お願いします。

○二條委員 まず、計画の取りまとめをいただきまして、東京都の皆様、本当にありがとうございました。大変すばらしいものが完成したのではないかなと思っております。

先日、台湾の国立体育大学で講演をさせていただく機会がありまして、その際に、自分のキャリアの話もさせていただきつつ、一部としまして、東京都スポーツ推進総合計画のお話もさせていただきました。東京都としては、これから、このようにスポーツ振興を計画していますというお話をさせていただいたのですが、参加して下さった台湾の方々から、本当にすばらしいので、見本にさせてもらいたいというお話をいただきました。日本のモデルケースということだけではなくて、世界的に誇れる推進計画になったのではないかなと感じました。

私は世界陸上とデフリンピック、2大会とも、視察をさせていただきました。その際に、本当にたくさんの方々を観戦に来てくださっていて、本当に日本人の皆様は、やはりこんなにもスポーツが好きなのだということ、改めて現場でも感じさせていただきました。

どうしても、パラリンピアンとしましては、東京でのオリパラも有観客だったらなという思いがよぎってしまったのですが、しかし、ここまで都民の皆様、会場にいらっし

やった皆様が、スポーツに対して魅力を感じてくださるといのは、無観客にはなってしまうものの、東京大会に向けて、事務局をはじめとした東京都の皆様がご準備して下さって、ご尽力いただいたからこそ、皆様の中にスポーツ好きの土台が根づいたのではないかなと思いました。改めて、今回、東京大会に向けての感謝の気持ちを感じております。ありがとうございました。

そして、視察の中で感じたことといたしましては、子供たちへのプログラムが、やはり充実していたなと感じております。ふだん小学校、中学校で講演をさせていただく機会が多いのですが、やはり子供たちに向けて”バリアをフリーにしていく”のではなくて、”バリアをつくらない”という意味でも、デフリンピックや世界陸上を通して、子供たちへの授業としてのプログラムがあったことが大変素晴らしいなと思いました。また、通常校だけではなく、特別支援校の皆様への工夫もご配慮いただき、プログラムをつくっていただいたことにも、感謝申し上げます。

また、両大会を通じてなのですが、コミュニケーションの大切さというものを改めて感じました。デフスクエアや世界陸上でのメダルプラザなど、選手と一般の方が、コミュニケーションを取ることができるような工夫、企画をしていただいています、大変そちらでも盛り上がってありました。「する・みる・支える・応援する」という、それぞれのグループといますか、カテゴリーといますか、それぞれの部分でのコミュニケーションはあっても、そこを超えてのコミュニケーションが今後はより必要になり、そこが充実することによって、さらに社会として、スポーツを通してのコミュニケーションが生まれるのではないかなと感じました。

以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。幾つも貴重なご示唆をいただきましたが、バリアをなくすのではなくて、バリアをつくらないという、そういうところからスタートしていくという話は、大変これは重いお話だと思いました、ありがとうございました。

「する・みる・支える・応援する」が、それぞれではなくて、それを越えたコミュニケーションが大事なのだという、非常に重要だなと思いつつ。具体的にどこから手をつけていけばいいですか。

○二條委員 そうですね。ハード面に関しては、例えば競技場に車椅子席を設けるといのは、これまで東京大会を機に大分整ったと思います。ですが、そこに車椅子ユーザーだけがその席を利用できるなどではなくて、例えば私がアメリカにメジャーリーグを観

戦しに行ったときに、幾つも車椅子席が用意されていますと、もちろん、車椅子ユーザーが、優先でチケットを購入することができるのですが、ある一定の時間を設けて、例えば、24時間を切ったら一般開放します、という方法が採られている球団がありました。そうすることで、当日私が野球を見に行ったときも、車椅子席でありながら、隣には健常者のカップルの方が座っていて、回の交代のときなどに、一緒に歌を歌ったり、写真を撮ったり、コミュニケーションをしたりということがありました。車椅子席を車椅子ユーザーとその同行者だけが座れるというのではなくて、何かそういったルールを設けながらではありますが、一般の方とも交流をできるような機会になれば、「えっ、テニスを行っているの、では、今度は、テニスを見に行くわ」など、スポーツを通じたコミュニケーションの広がりにもつながるのではないかなと思いました。

○松尾会長 ありがとうございます。大変勉強になりました。ありがとうございます。

それでは、次に、水村委員からご発言いただけますか。お願いします。

○水村委員 お茶の水女子大学の水村でございます。

今期は、本当にスポーツ推進総合計画が立案されたということで、それに関しましては、都庁の皆様、大変ご尽力いただいて、丁寧につくっていただいたなと思っております。私としては、本当に自由に意見をさせていただいた中で、やはり「する・みる・支える」に加え、「応援する」が入ったというのは、とても大きかったというか、もう簡単に言ってしまうと、推し活の文化が、東京都のスポーツ振興の中に入ってきたというのは、まさにいまどきの、私も女子大の教員をしておりますので、若年女性のスポーツ参加を増やすというのも一つの目的だったと思いますので、そこに新たに何かアプローチできるなと思いました。

この会議を通じていつも思うのは、スポーツに興味のある方は、たくさんいらっしゃるのですが、やはり参加率を上げるためには、今全く興味のない方がどう入ってくるか、その入り口としては、本当に「応援する」というのを「する・みる・支える」の後ではなくて、「応援する」から始めて「応援する・する・みる・支える」ぐらいにしてもいいかな、と私自身は思っております。しかし、本当にその意見が通ったということが、私としては大変大きな喜びでございましたし、ここにいたかいがあったなと思っております。

また、世界陸上とデフリンピックも、視察をさせていただきまして、こちらも非常に昔の、いわゆる一般的なスポーツイベントと捉えた場合には、やはり世界陸上は陸上に

興味がある方がいらっしゃって、デフリンピックは、聴覚障害者に何らかの関係がある人が来るというような、実は私が長く行っているダンスもそうなのですが、ダンスに興味がある人だけが劇場に来るみたいなのが、古いやはり価値観だと思うのですが、今回本当に世界陸上も、あるいはデフリンピックも陸上に興味がない人が来る、あるいは例えばデフリンピックも、きこえる人が普通に来て、きこえる人として自然にそこにいられる、そしてきこえない人も、きこえにくい人も、皆様がそこに普通にいることがとてもすてきだなと拝見して思いました。この辺りは、本当に都の方たちの長い時間をかけての、スポーツをめぐる文化を少しずつ広げて多様にしていって、非常にインクルーシブな雰囲気にしていただいたおかげかなと思っておりますし、そこが本当にスポーツの場が、文化的で多様になったということを委員としても実感させていただけたというのは、本当に都の皆様方のご尽力かなと思っております。

先ほど、ねんりんピックに向けてということで、お話がありましたが、この辺りもやはりねんりんピックというと、高齢者が来て、高齢者に関わる方がって非常に何かシルバーな場に、普通にいくとなると思うのですが、是非、そこにいまどきの若者と子供たちなど、普通はねんりんピックに来ないような方たちが、入りやすいような仕掛けをつくっていただけるといいのではないかなと思っております。

先ほど種目を拝見しても、少しユニークな種目もありますし、将棋辺りは若い人から高齢者までで、何かねんりんピックを一つのきっかけに、高齢者に対するスポーツ振興により若い人など、そういうことに全くもともと興味がなかった人が、入るきっかけをねんりんピックが提供してくださると、本当に有難いし、私も、学生や自分の子供を見ている、やはり若い世代がリアルに今の高齢者の方たちがどう生きているかというのを、目の前で見るということも非常に大きな学びになるのではないかなと思いました。

以上でございます。ありがとうございました。

○松尾会長 ありがとうございます。

ねんりんピックとは、実は全年齢対応型の大会となった方が、新しくなるのではないかというお話でございました。全くそのとおりだと今思って聞いておりました。今大事なことをおっしゃってくださったのは、今までカテゴリー別、種目別など、そういうので集まっていたのが、今はそうではなくなってきたという話がありました。それは、ご尽力の賜だと思うのですが、肝は、先生、どこにあるのですか。要するに、何でそうなったのか、自然に変わるわけでは恐らくないので、これからより進めるにあたって、

ここが肝ですと、押さえるポイントがあるわけですが、それはどうでしょうか。

○水村委員 一つは、やはり意図的に何かそういう全く興味がない人たちに向けてのイベントや仕組みを前に出すということと、あとは今では、SNSを通じた発信は、ある意味、どこでバズるのか分からないという時代ですが、そういう意味では、若い方たちのオピニオンリーダーになるような方たちが、こういうイベントに関わったり、興味を持ったりなどという、本当にキーワードでSNSですと、情報が発信されますので、そういったある意味、意外な展開をどう狙うのかなど、少し私も分かりませんが、何か少しそういう発想が、いわゆる今まで行ってきた形ではないことをやるのが一つかと思えます。

○松尾会長 意外だったみたいところが実は必要になったり、どこでバズるのか分からないというSNSの問題や、若いオピニオンリーダーがやはりきっちりと関わってくださるということも大事ではないか、といったことも含めまして、今、担当の黒田課長は一生懸命メモを取っておられるようでございますので、是非、そういうのを生かしていただければ有難いと思えます。ありがとうございました。

それでは、宮地委員から、今度ご発言いただけますか。

○宮地委員 宮地でございます。

皆様、言及しておりますが、応援することが今回の新しい計画の中に盛り込まれまして、非常に素晴らしいことだと思うのですが、最近この応援することの効果は、多面的に科学的に評価されるようになってきました。アスリートに対しては、応援されることによって、パフォーマンスであったりなど、あるいは自信であったりなどといった、社会心理的なものが高まっていきますし、生理学的には、応援されることによって、自律神経の調節がうまくいったりなど、そういったことでパフォーマンスが上がる生理的な背景なども分かってきました。応援されることのポジティブな影響が明らかになってきました。

最近の研究で特に注目すべきは、観客、応援する側の観客に対しても、よりよい効果があるということが分かってきました。例えば幸福感を感じたりなど、あるいは一体感、つながりを感じたりなど、それから、生理学的には推しのチームを応援することで脳内のエンドルフィンが分泌されたりなど、あるいは心が整うなど、そういったようなことが分かるようになってきました。すなわち、応援することがコンセプトとしてあるのは、みる側にとっても、プレイする側にとっても、科学的な根拠があって、意味があ

ることだということが分かってきましたので、是非、これから総合計画を踏まえ、8年、9年取り組まれていかれると思うのですが、是非、応援をどんどん推して欲しいなと思っております。

一方で注意しなければいけないことは、この応援がネガティブに作用することもあるということが、社会的にもパフォーマンスに対しても、あるいは応援する本人にとってもあるということも分かっています。本当に一生懸命推しているチームが負けると、悔しくて、悲しくて、フリーガンのように暴徒化したりなどということが、観客側にありますし、SNSなどの影響などもあって、期待に添えなかった選手が、激しい攻撃を受けたりなど、そういうことなどもあって、応援することを推奨していくときに、よい応援ってこうなのだということを、この東京都のこの取組の中で示していくことができれば、まさに応援する都市東京ということで、新しいスポーツ文化というのを作っていきけるのではないかなと思いますし、私たち、学術に関わる者もそのために必要なエビデンスというのをつくっていきたいと思っております。

引き続き、学術の面から応援していきたいと思っておりますので、何かありましたら、お声がけいただければと思います。よろしく願いいたします。

○松尾会長 ありがとうございます。

先生から以前ご指摘いただきましたような「みる・する・支える」の中で、私たちは、運動は「する」ことだ、「する」ことによって効果があると考えがちだが、「みる」、あるいは「応援する」ということも実は運動に匹敵するような効果があるのだということで、私はびっくりした記憶がある、つい最近のことでありましたが、そういう応援するということについての、身体的な、あるいは生理学的な効果、効用というのはやはり認められていると考えていいのでしょうか。

○宮地委員 はい。もうはっきり最近は出てきていますね。私どもの早稲田大学の研究でも、脳にいわゆる血流測定をして、応援をしているときには、応援している人の脳の前頭葉の辺りがぱっと活性化するなど、いいプレイがあると、それが、複数の人に同期して起こるということが分かってきました。

○松尾会長 同期して起こるとはどういう意味ですか。

○宮地委員 要するに、複数の人が、同時にあるプレイを見たりすると、同様の脳の反応が起こると、そういう装置ができてきたことでそういうことが明らかになってきていますし、今後そういった研究がどんどん増えてくると思います。プレイヤーのいわゆる歓

喜だったり、喜びだったりなど、いいプレイをしたというその気持ちと、みる側の気持ちとが一体化して同期していくというようなことも、今後は、研究としては、明らかになってきたりもするのではないかなと思っていて、そういうことがよりみることであったり、応援することの価値というのを高めていくことになるのかなと思っています。

○松尾会長 逆に自分が応援しているチームがもう逆転負けでもうがっかりというと、やはり脳内の状況というのは、全く違う状況になるのですか。

○宮地委員 やはりよくない心理状態になります。ところがこれ大事なことで、私たち、トレーニングして体を鍛えていたりなど、あるいはよく教育の場面では、つらいことは買ってでもしろ、子供には旅をさせろなど言いますが、やはりいい刺激と悪い刺激、刺激というのはちゃんとした振幅がないと将来の発展につながらないのですね。それを避けて、そういう振幅など波を避けて穏やかな生活ばかり送っていくと、それは衰えていくばかりだし、元気につながらない。やはり勝ったり、負けたりと刺激、この振幅が多いほど、エンスージアムというか、熱狂であったりなど、そういうものにつながっていきますし、体がそういう刺激によって、トレーニングされていくというだけではなくて、心理的、社会的にも、頑強性を高めていくためには、実はそういう刺激が必要なのだよねということは、恐らく今後の研究で明らかになっていくだろうと、私は仮説を持っていますので、そういうことを証明できるような研究をしていきたいなと思っています。

○松尾会長 そういった意味では、やはり応援すればいいという話ではなくて、応援文化というのをよりしっかりとつくっていかねばならない時代に来るだろうということですね。

○宮地委員 プレイする側に対して、ドーピングであったり、コンプライアンスであったりなど、そういうことはどんどん厳しくなっていますし、トレーニングの仕方も科学的なものを取り入れられるようになってきましたが、今後はみる側であったり、応援する側が科学的な根拠に基づいてよりよい見方とはなんなのか、応援の仕方ということをつくっていくことが、スポーツをよりよい文化にしていくためには、必要なのかなと。

○松尾会長 ありがとうございます。大変貴重なご示唆をいただきまして、ありがとうございます。

続きまして、今度は原委員にお話を聞きたいのですけれど、今の応援する側の話と、応援される側の話も含めまして、これからの応援文化についても最後少し触れていただ

けると有難いなと思っております。原委員、お願いします。

○原委員 欠席の予定だったのですが、出席させていただきました。

これは、恐らく箱根駅伝に向けて余裕なのだなどというような、それは冗談でございまして、一言、話をさせてください。

総括ということで、東京2025世界陸上のお話、専門でございますので、少しお話をさせていただきます。

世界陸連など、そして、東京都におかれましては、これ大成功に終わったと、私は認識しております。そのイベントにおける成功というものは、普及と勝利と資金の高循環から成り立ってくるのだと思うわけなのですが、普及という側面で言えば、大変多くのファンの皆様に集まっていただいた、先ほどから当該スポーツだけではない、いろいろな方々が集まっていただいたという点で、陸上界の底力を発揮できたのかなと思っております。

また、資金面につきましても、報道によると、かなりの収益を得たとお伺いしておりますので、この点についても成功を得ているのかなと思っております。

勝利というような形なのですが、これは世界陸連や東京都における勝利というものを、運営を安全に効率的に効果的に行うということを勝利と捉えるならば、本当に大成功に終わっているわけなのですが、残念ながら、日本陸連において、果たして勝利したのかですよね。私は大惨敗に終わった大会だと思っているのです。これはあえて厳しいこと言わせていただきます、当事者でございます。にもかかわらず、日本陸連の幹部があたかもよかった、よかった、勝利したような口ぶりでPRしていることに私は愕然といたしまして、これは、私は日本陸連の幹部ではありませんので、直接言うタイミングがないのですが、いろいろなところでちくちく言っていこうかなと思っているところです。冷静に考えると、この結果は、負けていますからね。当該開催国で時差もなくて、現地での移動もなくて、食事もよくてというようなところで、本当に環境が他国と比べて非常にいいわけですね。にもかかわらず、この結果は、実際には負けているわけであって、そのハンディをプラスに生かせなかったことは、大きく反省すべきではないかなと思っております。

ということで、スポーツの成績には、今までは心技体、心を鍛えて技術を磨け、心技体、体を鍛えていくようなのが、今までの定説でございました。これを否定するわけではございません。これも当然大切な要素でございますが、私は昨今いろいろなところで

技体心という言葉を使わせていただいています。正しい技術を持って指導していくことによって、正しい体ができて、結果、心が養われていくというような形です。ですから、指導者とは正しい技術を持って、また、スポーツだけではなく、いろいろなビジネスマンの皆様も上司も正しい知識を持って指導していくからこそ、成果につながっていくのであるというふうな考え方を最近では唱えるようにさせていただいたところでございます。

応援は非常にこれ、有益でございます。例えば先週行いましたMARCH対抗記録会という1万メートルの競技があるわけですが、光線をばーっとショータイムのごとくやりまして、ライトアップして、あたかもコンサート会場に来ているような形を取りまして、かつファンの皆様も千何人もの方々が有料観客の中で来ていただいて、そういう環境でやると、やはり自己ベストが本当に出てくるのですよね。かつてないほどの自己ベストが出てきているというようなところでございますので、応援の力というのは、宮地先生、おっしゃったように、もうアドレナリンがばっと出まくって、もうビックパフォーマンスが出てくることを現場レベルでも証明させていただいております。

以上でございます。

○松尾会長 ありがとうございます。

しかし、ネガティブな応援の仕方など、SNSで例えば何かこう誹謗中傷を受けるなど、そういう応援の仕方についてはどう対応すればいいですかね。

○原委員 もう若者は、SNS慣れはしているのだと思うのです。それは、もう我々が普通に、少し下世話な話をすると、昔、有害図書がありましたでしょう。有害図書を反対、反対とありましたが、もはや一般的にこうなっている中で、ゼロにするのではなく、きちんとすみ分けする知識というか、判断能力というのは、ある一定数の若者は持っているのではないかなと思うのです。指導者の立場からすると、本当に嫌になったら、そもそも見るなど、そういったものに手に触れるなど、しかし、これは現実的には難しい話だと思います。やはりこういったSNSの時代は、もうそこでどう共存していくかということ、指導者が教えることも大切なのですが、今頃の若者はもう生まれ持って手に取って生活してきていますので、もうきちんと判断できているのかなと私は思っています。

○松尾会長 一方で、要は最近のスポーツのキーワードとして、第3期のスポーツ基本計画もそうでしたが、学習指導要領にどうするかという議論が今進んでいますけど、いわゆるフィジカルリテラシーと言うのですか、今だと、情報リテラシーではないのですけ

ど、いろいろな情報があふれていて、自分がどうそれに関わって運用していけばよいか、リテラシーのよいところは運用能力というものでしょうか、情報があふれていて、どれをどう扱えばよいのかが分からない状況の中では、やはりリテラシーを身につけていく、特に体の問題、技術もそうですし、そういう情報に対してのリテラシーもつけていくべきなのではないかという議論もありますけど、その辺りいかがですか。

○原委員 少し視点が変わるのかも分かりませんが、大人が、親が、学生、子供に対して、失敗しないように、失敗しないように、全て先んじて答えを出すような傾向に、私はあると思うのです。ですから、命に関わるような失敗は絶対あり得ないですが、やはり、失敗を容認する社会を私はつくるべきだと思っているのです。ですから、教員も親もそうなのですが、教えるという教育ではなくて、支えるという教育に視点を持って教育をしていくことが、私はある意味理想形なのかなと思っています。

○松尾会長 ありがとうございます。支えることで、リテラシーを自分で育てていくような、そういう環境をつくるべきだとおっしゃったのだと思いました。ありがとうございます。大変勉強になりました。

続きまして、塩見委員にご発言いただきたいと思います。先日はお疲れさまでございました。

○塩見委員 MARCHの大会では我が中央大学の後輩たちも27分台を出させていただいたのですが、本番はさすが原監督だと毎年思ってしまうので、来年はどうなるのかということで、それはともかくですね。

今回の計画で、キーワードから三つ、DXとウェルビーイングと応援するというところで少し話させていただきたいと思います。DXというのは、競技団体等の組織基盤強化のために必要だということもあるのですが、やはりトップアスリートの育成やどうつくっていくかの中で、科学的と言いますか、DXの力を使いながら、汎用的に何か選手強化ができればなということを少し思ったりしております。

次に、ウェルビーイングなのですが、これも、名古屋で全国のレクリエーション大会の全国大会がありまして、ちょうどそのとき、全日本学生駅伝が、熱田神宮からスタートするので、原監督がバスに乗るところだけ見たのですが、その後、松尾先生がコーディネーターなさっていたシンポジウムに参加しまして、そこで、松尾先生のウェルビーイングの考え方の中ですごく思ったのが、私もシニアスポーツ、いろいろなところで見ているのですが、やはり組織化された団体で常に行っている人たちは、80歳でも90歳

でも、常に活躍の場があって、そういうスポーツに親しむチャンスがあるのですが、そういうところに属さない人たちを、どう参加させるのかという中で、松尾先生が、まさにあのとき、スポーツウェルネス吹矢協会の人たちに、なんで吹き矢の人たちは、高齢のしかも男性がそんなに参加されるのだというご質問されておりましたが、いろいろな議論の中で、吹き矢を吹くときのかっこよさなのではないかといった話をされたのですが、やはり何も属さない人たちが今回ねりんピックもある中で、どのように自分が体を動かして、そういうところに参加するのか、その辺の問題というのはやはりすごく大切だなと思いました。

最後に「応援する」ですが、やはり現場で見られればよいのですが、私も田舎が福島県だったので、当然当時は民放もなくて、テレビの放映は巨人戦しか行っていなかったわけです。ところが、今巨人戦も地上波ではやらないと、我々、学生の頃は、箱根駅伝は地上波であんなフルには放映されていませんでした。ただ、原監督がいる以上は地上波でずっと放映を続けられると思うのですが、その次に、はたしてずっと地上波で扱っていただけるかどうか分からないと思ったりします。実はご案内のとおり、今スポーツの中継等はネットメディアなど、いろいろなところがあって、そういったところで配信されていますし、これにアクセスする人たちは、自由にいろいろなスポーツを見られるわけですが、それも普通の人たちにとっては、少しハードルが高かったり、そういうことあると思うのですね。ですから、やはり「応援する」にどうアクセスしてもらうか、その辺のことを地上波だけでなく、ネットでも、今回デフリンピックでも、かなりのアクセスがあったわけですが、どのように普通にシニア層も含めて行っていくか、本当の意味でそういう応援する土壌をつくっていけるのか、それが大事だなということを思いました。

以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。

DX、ウェルビーイング、そして、応援をキーワードにお話をいただきました。特に最後の点について、確かにテレビが非常に重要なメディアツールであり、大事な応援するメディアなわけですけど、地上波で観られなくなっているスポーツもかなりありますよね。そういった意味では、いつでも応援できるような状況をつくっていくということが、とても大事なのではないかというご指摘、非常にやはり重要なご示唆だと思いました。

最後に、トップアスリートも含めて、DXで汎用性を持ったものをつくっていくべきではないかというお話がありましたけど、具体的に何かご示唆があれば教えてください。

○塩見委員 これは、今後武田部長がいろいろ考えてくれるのだと思うのですが、役割分担の話があって、当然、国はナショナルトレーニングセンターでかなり科学的なことをなさっていると思うのですが、それを、一般的な汎用型として、例えば水泳で言うと、どの辺の位置で泳げば記録が出るのか、走り方でもそういったことが、うまく言えませんが、そういうDXの力を借りながら、何か競技力向上みたいなところに結びつけられるようなことがあれば、試すことは大事なのではないかなと思います。

○松尾会長 ありがとうございます。これは、これからの重要な課題になってくるかもしれませんね。

それでは、加藤委員から、ご発言いただければと思います。よろしくお願いします。

○加藤委員 まず応援することなどの観点について、話を少しさせていただきたいと思います。

私も教育現場でいつも生徒と一緒にいろいろ行っていて、授業も実際行っていますが、やはり授業中、生徒にポジティブに接するように心がけております。嫌なことがたくさんありますが、それはそれで置いておいて、生徒の前では、本当に明るく元気に対応する、ここはすごい重要なことで、大人がポジティブになっているというか、自己肯定感を高めていないと、生徒も高まらないということがあります。大人がちゃんとしなくてはいけない。特に、姿勢といえば、指導者と生徒の間での対立関係ではなくて、一緒に走っていくという考え方が私は必要かなと思っていて、なかなか年を取ってくるとしんどいものですが、やはり一緒に走っていくということが重要だと考えています。

ただ、実際ネガティブなことがいろいろ起こりますが、自分自身の心に思うこともそうですし、生徒にもよく話すのですが「何でもええやん」と言ったりなど、それから、「多様性があるね」と言ってあげると、生徒は意外と安心しているのを感じます。多様性だよ、などと言っていくと安心してくれているなと思います。

さて、それでは、二つの大会に関しての感想、特にデフリンピックについてのことになるのですが、お話をさせていただきます。デフリンピックがあると聞いて、大会前というのは、私自身は全く分からない状態で、東京都庁の広場のところで、夏だったと思うのですが、ブースを設けていただいて、競技時に使用する点灯式のスタート装置というのですか、その装置を見た程度でして、デフリンピック大会を開催する意義もよく

理解していないと、それから、パラリンピックの一部の大会と認識しているぐらいの間でありました。しかも、今回100周年という記念大会で、説明によれば、どの国も手を挙げていない、その中で東京都が手を挙げたということで、まず立候補したことはすばらしいことだなど思っているのと、100周年を記念するほどの成功だったと思います。競技もそうでしょうが、スポーツイベントを通じて、東京の歴史、文化や芸術を紹介したこと、多くの小学校の生徒、児童を参加させたこと、それから、被災された県の子供たちを招待したりなど、ブースを設置するなどして聞こえない人、聞こえにくい人への理解を広めたこと、それから、聞こえない人でも、様々な場面で活動できる機械、機器、システムを紹介するブースを設置したこと、25ものブースを会社や組織など、そういったものの参加をいただいたことなど、さらに例えば清水建設と大林組といったような、一つの業種の中で、二つの会社が参加するということは基本あまりないようなのですが、デフリンピックでは、多くの参加企業を得た、こういう企業を取り込むという作業を事細かくというか、丹念に行っていたいただいた多くの東京都の職員の方々に、やはりチャレンジ精神など、努力というか功績というのは非常に大きかったなと思いました。世界大会ですから、外国からの多くの方々が参加されまして、観客も含めて、日本、東京を知ってもらいよい機会になったと思いました。これがスポーツの力なのかなと感じた次第であります。

大会後につきましては、デフで呼んだ子供たちに対して、今度は選手が小中学校に行き交流の機会が生まれれば、また、より理解が深まるのかなと思います。

最後に、私自身は二つの大会に視察に行きましたが、ここに参加されている委員の方、誰もいない状況で、私1人だけが数名の職員の方に大切にされて、本当に申し訳なく思っているのですが、感動的な視察でありました。対応して下さったその職員の方々は、熱心に世界陸上、それからデフリンピックの大会運営について語って下さったことは、今でも印象に残っていますし、二つの競技に対する理解のみならず、デフリンピックでは、聞こえない人、聞こえにくい人への理解というのをした上で、熱く語っていただいたことが、私自身の今回の大会で一番印象に残ったことだと思いました。

今回、手短かに語るという、5分以内ということでございますが、語ることに逆に申し訳なく思うような内容でございます。ありがとうございました。

○松尾会長　ありがとうございました。

最大の賛辞をいただきまして、本当に有難いことだと思えます。

委員に少しお尋ねをしたいわけですが、子供たちの多様性ということ、そこに反応して、自分もここにいてよいのだというような、安心感を持つ子供を含めて、今回、デフリンピックが成功裏に終わった、それをどうつないでいくのか、施設的にはレガシーとしていろいろな光で伝えるということが大分進んでくるというのもすばらしいと思っているわけですが、それ以外に子供たちに今選手たちが来て、それを伝えるという話がありましたが、どのように、これをつないでいくかというので、何かよりこんなことやったらよいのではないかというご示唆があったら、教えていただけると有難いです。

○加藤委員　そうですね。恐らく代々木など、いわゆる会場に行った子供たちにとってみれば、その場の映像などは記憶に残っていると思うのですね。記憶に残っているものを見せた上で、デフの選手が行って、手話など、それから機器、システムなど、そういうものを使って表現していけば意思の疎通ができる、そういった活動を継続的になさることがよろしいかなと思います。それは、まず基本になるようなところをつくっていただき、あとは横に広げていくというようなことは必要かなとは思いますが、まずは来ていただいた子供たちに対してのアピールというのを行っていただければ、それだけでも全然違うなど、皆様、すくすくと育ってくれると思います。

○松尾会長　ありがとうございます。逆に言えば、日常の教育の中に、今からスタートしますよと、よーいドンと言わなくても、光で赤、黄色、青で変わるスタートランプのようなものが子供たちに自由に使えることができれば、よりそれが一般化されるのではないかなと思ったりもしますが、教育に入る可能性というのは、必要性というのはいかがですか。

○加藤委員　そこについては、何とも言えないのですが、例えば体育祭など、そういったところに入れたところで、観客の保護者など、それを見て理解していただけるかどうか、まず一つかなとは思いますが、もし、そのことを分かっていたらいいのであれば、ピストルを鳴らさないでもやられていることが恐らく理解できるかなと思います。やはり、一つ一つ行っていくしかないのかなと思いますが、ただ、相当の予算が必要かもしれません。あとは東京体育館のようなところをいろいろな学校が使えるようにしていくなど、そういう施設面での充実が必要かもしれません。

○松尾会長　ありがとうございました。やはり丁寧に進めていく必要があるということも、改めて感じました。

それでは、第29期初めてとなりますが、桐山委員からご発言いただけますか。お願い

します。

○桐山委員 皆様、こんにちは。初めてこの審議会に参加させていただきます。東京都議会議員の桐山ひとみです。

まずもって、世界陸上と、そして、一昨日無事に閉幕をされました東京2025デフリンピック、本当に両大会を通して、関係者の皆様や、あるいはこの東京都の職員の皆様のご尽力によって、大盛況のうちに終えられたこと、本当に敬意と感謝を申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました。

世界陸上はやはり名も通っていて、他国で開催をされても、先ほど出ていたように、テレビ、いわゆる地上波を通して観戦できる機会があり、多くの国民の皆様が知っている陸上の世界大会であり、テレビを通して、会場に行けない方が観戦をできる大会ということで、すごく知名度も高い大会の一つだと認識しています。

また、東京都はオリンピック、パラリンピックが無観客だったということもあって、この世界陸上を通して、子供たちの参加できるメニューをたくさん設けていただいたり、あるいは先ほども出ていました重度障害の方々が会場に行けなくても、代わりに分身ロボットが体験をする機会を設けていただいたり、様々な観戦の機会もつくっていただいたというのは、大変有意義な機会になったのではないかなと感想を持っています。

また、デフリンピックは東京都としても我々都議会議員としても、最初、招致をする段階から、いかにして東京都が招致をしながら、取り組んでいけるかからスタートをしたと思います。そんな中で、ろうあ連盟の皆様方が、まずは、東京都としては手話言語条例の策定をしてほしいということで、都議会一丸となって全会派が、しっかりこの手話言語ということでの条例を制定し、そして招致をし、そして聞こえる人も、聞こえにくい人も、しっかりとともに共生する社会の実現のために、このデフリンピックを成功していこうということで、盛り上げていこうということで取り組んだことも、私としては感慨深い大きな大会になったのではないかなと思っています。

また、私もデフリンピックの会場、かなり視察をさせていただいたのですが、本当に先ほどもバレーボール会場が満席になっていたという一方で、私も東京武道館にも足を運ばせていただきまして、柔道会場が初日から満席で、それこそ外に並んで入れない方々がいたということで、自分が行くときの混雑状況を見たところ黒バツで、今日は、私が行くときもバツで入れないのかと思っていたのですが、ちょうど入替えの段階だったので、無事に私も中に入って観戦をさせていただくことができました。本当に様々な

PRなど、認知度向上のために、様々盛り上げていただいた結果、このように多くの方々を会場まで運んでいただいたというのは、本当に私たちも、最初、会場本当に埋まるのかをすごく心配をしていたのですが、結果的に大盛況だったということで、本当にうれしく思っているしだいです。

また、この大会を通してユニバーサルコミュニケーション、テクノロジーを活用した取組で普及活動もさせていただいたところなのですが、多くのこういった情報保障など、障害のある方にとって、なかなか情報が行き届かないこともありますし、同じ健常者が体感できていることを、障害のある方にもしっかりと体感してもらって、同じように観戦できる機会をつくっていかねばいけないなということも改めて感じており、また、それをしっかりとこの大会を契機に前進をしていかないといけないのだと思っておりました。

感想は以上なのですが、私が、今すごく感じているのが、実は、私、特別支援学校の在校生や卒業生に今ダンスサークルのダンスの指導をさせていただく機会をいただいております。そういう知的障害の方々とは接する機会がすごい最近多いんですね。やはり保護者の方々から多くいただくことというのは、先ほどもあったと思うのですが、どうしても、自分たちが選べるだけのスポーツをしたいなどという環境がまず整っていないから、少しでも自分たちが選べるような環境をつくってほしいのだということを言われることが多いです。私も実際経験をして、この子は、どのぐらいまで理解をしてもらえのだろうかなど、この子はこのぐらいしかできないのかなど、そういう先入観でもって、自分も指導者として、現場に立っていることがあるのですが、しかし、実はいろいろなことがいっぱいできるという発見があって、そういうことを、やはりこれからしっかりと皆様が、障害のある方と接する機会を増やす中で、いろいろなことが実は障害のある方もできるのだ、そして、そういう環境を整備していかないといけないのだということを、改めてしっかり行っていかねばいけないと感じているところです。そのためには、やはり根本にあるそういう指導者、健常者を教える指導者はたくさんいると思うのですが、しかし、障害のある方々に対する指導者がなかなか現場にいないという現実もあり、私自身もやはりそういう身近で気軽に、資格制度はあるのは分かっているのですが、そういう方々がより気軽に地域の中で、研修というか、受けたいときに障害のある方の特性だったりなどを知りながら、指導者のスキルアップをするなど、そういう場所がより増えていけばよいのかなと課題を持っておりますので、引き続き取り組ん

でいきたいと思います。ありがとうございました。

○松尾会長 ありがとうございます。

やはり全ての子供たちが、今学校の部活動の地域展開もそうなのですが、子供たちが、自分で選べる範囲をどう保障していくのか、どういう環境をつくればよいのかというのは、非常に課題ですよ。

それでは、ゆもと委員からご指摘いただけますか。お願いします。

○ゆもと委員 私も、初めて参加をさせていただきます。東京都議会議員のゆもとでございます。よろしく願いをいたします。

世界陸上、それからデフリンピックは二会場、私も実際に視察、参加をさせていただきました。感じたことは、今までは実際に運営を行っている結果を一観客、聴衆として見ていたのですが、実際現場に行くと、運営をしている人たちは、最初からこれがうまくいくかどうかというのは、分からない手探り状態の中で、一生懸命この会を作り上げている。この臨場感みたいなものが、まず運営側には運営側の、要は何が言いたいかと言うと、こういう会を成立させるためには、本当に多くの人たちの努力が結集されて、この大会が開催をされたのだなということ、まず感じました。

それとともに改めて感じたのは、このすばらしい大会を開催していく中で、能動的に見ている人たちが、自分たちもその内容を見たときに能動的にスポーツにどう関わるかというアクションを取ってくれるかどうか、この行動変容につながっていくか、つながっていている人たちがかなり多くいたのではないというのを感じています。世界陸上の後に自分も走ってみたいなど、陸上に興味を持ったという人は、私の周りでも非常に多く増えましたし、パラリンピックであったり、今回、行われましたデフリンピックについても、自分たちが障害を持っていても自分たちもやろうと思えばやれるのだ、だから、やるためにどうしたらよいかということ、周りにヘルプを自分から発信する、そういう行動を取っている子供たちも拝見していて、その頑張っている姿を見ることによって、人の行動を変える、気持ちを変える、こういうインパクトを残せた大会が、この二つの大会だったのではないのかなと思います。

それと、もう一つはこの大会を支えていたのが、東京の企業の皆様のサービスや技術、これが随所にあったということは、非常に東京で開催した意義がここにあったのかなと思います。

さらには、この7億回、動画が再生をされたということや、テレビの視聴も8,000万

人ぐらいが見たということが報告書の中に書かれておりましたが、多くの人たちがみるということは、発信をしたらそれだけインパクトがあるということですよ。だから、この東京のすばらしさやスポーツのすばらしさ、これを、ここまで多くの人たちが受け取るだけの器ができた。それが、私は、今回の世界陸上やデフリンピックだったと思います。

これは、いきなりできたのではなくて、東京オリンピック、パラリンピックからの継続がまさにレガシーとしてこういう結果を残したのではないかと思います。だから、ここまでつないだ形というものを、今後はどうつなげていくか、こういうことも考えながら、東京都政としても展開を図っていく必要があるのではないかなと思います。

以上です。

○松尾会長 おっしゃるとおりでございます。これを行動変容に持っていくという、応援するというのは、一つの切り口になって、「する・みる・支える」ということの行ってみたいなど、支えてみたいなど、そういうふうになっていくような動きを、やはりアクションとしてしっかり起こす必要があると、こういうこと大切ですよ。

○ゆもと委員 そうだと思います。

○松尾会長 本当に勉強になりました。ありがとうございます。

それでは、内山委員から、ご質疑いただけますか。お願いします。

○内山委員 改めまして、都民ファーストの会の内山と申します。よろしく申し上げます。

初参加でいきなり総括に対する審議ということで、僭越過ぎるので、できるだけ短く、かつもう第一コーナー回って、第四コーナーまで来ていますので、お話しさせていただければと思います。

まず、何よりスポーツ推進本部の皆様方、本当にこの大きな二つの大会、お疲れ様でした。もう改めて言うまでもなく、大成功に終わったということで、ほっと胸をなで下ろしているところなのかなと思っています。

ただ、一方で、先ほど原委員がおっしゃっていたように、何をもって成功かというのは、私たちはしっかりと考えていかななくてはならないのかなと思っています。大会が様々、円滑に事故なく、また今回あまりクローズアップされませんでしたけど、やはりテロ対策やこういったものも当時のオリパラの頃かなり綿密に練られていたと思いますが、当時は無観客でしたけど、今回こういった対策が、こういった世界陸上やデフリンピックのところで生きてきたというのは、まさにスポーツ推進本部の皆様のご努

力、また関係各位の皆様のご努力だと思っています。

ただ、一方で、この段階においては大成功に終わっているということでもありますけど、先ほど、ゆもと委員からもあったかと思うのですが、この東京都がこういった大会をしっかりと行っていくという意義、意味、価値というものを考えると、やはり社会変容をどのように行っていくのか、ということなのかなと思っています。そういった意味では、世界陸上という極めて分かりやすいネームバリューもある大会で成功を収めて、そこから次ということもあるのですが、やはりポイントは、デフリンピックが、私も文教委員会の質疑等々を通して、どのように告知をして、来場者を集めて、そして、選手の皆様の活躍だけでなく、選手の皆様の背景にあるものをどのように、特に子供たちや来場されている皆様に伝えることができるか、そして、その先の行動変容や社会変革につながっていくのではないかということ、ご指摘をさせていただいていきました。そのため、肝となってくるのは、やはりこのデフリンピック、その前にそもそもオリンピックがあって、パラリンピックがあって、そこから世界陸上、デフリンピックというものがあって、この東京という都市で、どういった社会変革につながっていくのかということ、これから、しっかりと私も見ていきたいなと思っています。

一方で、昨今どうしても日本人ファーストという言葉に象徴されるような、外国人や何かこう自分とは違うものに対する排他的な、別に外国人だけでなく、国籍だけではなく、SNSも含めて多いなと思っている中で、私もこの世界陸上、デフリンピックも何回行ったか分からないぐらい会場に行かせていただきましたけど、本当に多国籍であり、またデフリンピックのときに象徴的に思ったのが、実は何度かデフリンピックの大会のときに歌舞伎町に行ったのですが、歌舞伎町が海外の方であふれていて、それだけではなくて、手話であふれていたのです。これは、すごい光景だなと思って、恐らく皆様は歌舞伎町など行かれないと思いますので、見ていないかもしれませんが、私、たまたま何度か行きまして、その景色がすばらしいなと思いました。その後のマナーがどうかなど、そういう話は、私、分からないですが、ただ、そういうのを見て、こういうことなのかなというのを、大会を見た後、競技を見た後に繁華街でそういう光景を見て、強く感じました。こういったものが、今回は世界陸上、デフリンピックということで、海外の方との共生というか、相互理解というものもあると思いますし、一方で、パラリンピック、デフリンピックというのは、障害のある方も、ない方も、共生社会をつくっていくという、大きな前進につなげていくべきだと思っています。また、本日、報告事項に

ありました、ねんりんピックで言えば、今度は超高齢社会という日本全体が抱えている課題に、どうしっかりと切り込んでいくか、社会変革、どうつくっていくかにつながっていくと思いますので、そういった意味では、スポーツの持つ力というのは、よく使い古された表現ではありますが、スポーツの持つ力というのは、本当にすばらしい可能性、伸びしろというものが、改めてあるのだなというのを感じた二つの大会でございました。

ということで、私からは感想になりますけど、以上になります。ありがとうございました。

○松尾会長 ありがとうございました。

特にスポーツの力の、その背景というか、先ほど先生がおっしゃいました背景を、私どもは目配りをしなければいけないし、何をもちて成功なのかもポイントで、社会課題との関係において何を成功に導くことができたのかという視点も重要である、というようなご示唆だったと理解しています。

それでは、オンラインでご参加の皆様方にご発言を頂戴できればと思っております。

まず幸本委員、そして上代委員、そして高橋委員、ゼッターランド委員の順でご発言いただければ有難いと思います。よろしく申し上げます。

まず幸本委員から、ご発言いただけますか。よろしくお願いいたします。

○幸本委員 ありがとうございます。東京商工会議所の幸本です。

11月から当所の体制が変わりまして、文化健康づくり推進委員会の委員長を務めております。今期は東京都スポーツ推進総合計画の改定に加えて、世界陸上、デフリンピックといった大きなイベントがある中で、審議会の運営と取りまとめをいただきました。委員の皆様、会長、事務局の皆様に、心より御礼を申し上げます。

先日、視察に参加させていただいた世界陸上では、指導を受けている子供たちの生き生きとした様子や観客の歓声に間近に触れることで、スポーツが人に与える力は非常に大きいものであり、その可能性を改めて強く感じました。スポーツが幅広い世代に様々な形で浸透し、生活の一部となっていくことは、一人一人の健康だけでなく、社会全体の活力の底上げにつながると思います。

また、中小企業の観点から申し上げますと、近年の大きな経営課題として挙げられる人手不足、これを乗り越えるための重要な取組の一つとして、従業員の本質的な健康づくりに取り組む健康経営が注目されています。本質的な健康経営とは、WHOが定義し

ている、体の健康、心の健康、そして、それらを支える社会的な健康、これらの三つの健康が調和している状態を言います。つまり健康経営とは、従業員のウェルビーイング、これをつくり上げる取組であるということでございます。スポーツが人に与える力を鑑みると、職域でスポーツに取り組むことは体の健康のみならず、従業員の本質的な健康づくり、その全体に効果があり、ウェルビーイングに大きな効果があると考えています。健康寿命の延伸によって、生産年齢人口を増やすだけでなく、社内で本質的な健康づくりに取り組むこと、それ自体が働き手にとって、多くの企業の中から職場として選ぶ、そこで働き続ける、そういう要素となっております。そういった社会の流れを受けて、健康経営に対する企業の関心も高まっていると強く感じております。

東京商工会議所では、都と連携し、中小企業を中心とした都内企業への健康経営の推進に向けて、普及啓発や社内推進人材の育成などを進めてまいりました。今後も極めて重要な要素であるスポーツを含めて、職域での本質的な健康作りの促進に向けて、積極的に取り組んでまいる所存です。

私からは以上となります。ありがとうございます。

○松尾会長 どうもありがとうございます。

非常に心強いお言葉をいただきましたが、幸本さんに一つだけお聞きしたいのですが、やはり国としては働き盛りの年代が一番スポーツの習慣化という意味では、なかなか厳しい状況がございます。その中で、企業における健康経営、あるいはスポーツエールカンパニーという言葉で、今スポーツ庁が進めておりますが、東京都が、商工会議所と一緒に進めるにあたり、具体的に、例えばこんなことをやはり取り組んでみてはどうか、企業と一緒にになって従業員の皆様方をはじめ、ご家族も、働き盛りの皆様方がスポーツに親しんでもらうような、こういうポイントがあるのではないかとということがあれば、ご示唆いただければ、有難いのですが、いかがでしょうか。

○幸本委員 ありがとうございます。

それ、実はまさに健康経営だと考えておまして、日本の企業の99.7%は中小企業で、そこが雇用の70%を支えています。その中小企業の中で、健康経営が本質的に実践できれば、社員の皆様やご家族の皆様の行動変容につながると思います。これ、皆様ご存じのとおり、健康無関心層、これ70%います。これは、岩盤です。これをどう動かすかというのは、誰かが寄り添って、その人たちを動かしていかなければ、動くものではないと思っています。誰が寄り添うかと言うと、職場での責任者であったり、その中小企

業であれば社長であると、その人たちが特に中小企業においては、社長が社員をどれだけ大切に思っているかということや、それをいかに伝えるか、そのいかに伝えるかという具体的な方法が健康経営だと思っていますし、それはご家族へも影響を及ぼすものですし、それを目指して取り組むべきものだと思います。今も取り組んでおりますけど、これから、ますますしっかり取り組んでまいります。

○松尾会長 よろしくお願ひします。ありがとうございました。

それでは、上代委員からご発言いただけますか。

○上代委員 すみません。少し非常勤先の学校の廊下にいるので、響いてしまって申し訳ありません。

私からはまず「する・みる・支える」に「応援する」というものが入った総合計画は、自分たちで話し合っておいて、すばらしいものというのも恥ずかしいのですが、すばらしいものができたのではないかと考えております。これも東京都の皆様がきれいにまとめてくださったおかげかなと思っていますのですが、その後、つい最近私たちも視察させていただきました世界陸上、デフリンピックがあった中で、レガシーという言葉、東京オリパラのときもそうですが、もちろん、レガシー、いろいろな意味であると思うのですが、ハード面のレガシーという意味でも今回、視察させていただいて、こういうものを普通に使えたら、より便利になるのだろうなというようなもの、例えば東京体育館、見せていただいたときに、これを機に災害時のフラッシュライトが入ったのですというようなことを教えていただいて、今回はデフの方のためだったかもしれませんが、それが災害時に普通のときにも役に立つというものが、スポーツ施設に入るとするのはすばらしいことだと思いますし、さらに、「応援する」という部分からも、今回世界陸上とデフ、かなりの数の観客の方、都民の方が来てくださって、ふだんは恐らく興味を持たないのだろうなという方々まで来ていただいたので、そんなに来ていただいてうれしいなと思いました。

ただ、私、一つ懸念しているのが、スポーツイベントは、いつも言われていることではありますが、一過性なのですよね。例えば2019年にあったラグビーワールドカップのときは、子供たちがラグビー教室に入りたい、入りたいと言って、足りないぐらいになったのに、今はそこまで盛り上がっていないなど、さらに古い話しでいえば、2011年の女子ワールドカップ優勝したときの女子サッカーの盛り上がりはどこに行ったのだという状態になっていますので、やはりこれだけ都民の方が陸上など、あとデフ、障害者ス

ポーツというもの、それどころか、スポーツというものに興味を持ってもらったものを、どうやって熱を冷めさせないようにするかということも少し今後考えていかないといけないのではないのかなと思っているのが一点です。

もう一点は、これだけすばらしい組織をつくって、見事、閉幕まで持っていった組織についてです。東京オリンピックのときの組織もそうですけど、今回も陸連の方を中心として、世陸の組織、またデフの組織ってきれいにできていて、成功させているのですが、この組織は、1回、1回の大会で終わってしまうので、もったいないなと思っています。実は、これは、世界中で問題になっていることでもありまして、いろいろな国で、いろいろなこと行っていて、私、ちょうど科研費で研究させていただいているものでもあるのですが、この組織はレガシーとして使えずに、1回、1回、組織を一からつくっているのもったいないのではないのかなと思っております、その二点をうまくレガシーとして伝える工夫を今後していかなければいけないのかなと、今後については思っている次第です。

以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。

熱をどうやって冷まさせないような継続的な取組ができるのか、また、組織が1回、1回、ビルドしたら、スクラップしなければいけないところがあって、どうやって継続的にできるかが、非常に貴重なご指摘だと理解しました。すみません、廊下でとおっしゃいましたが、大変な状況でお話しいただきまして、ありがとうございます。

○上代委員 とんでもありません。

○松尾会長 ありがとうございます。

○上代委員 ありがとうございます。

○松尾会長 それでは、高橋委員からご発言いただければ、有難いのですが。お願いします。

○高橋委員 よろしく願いいたします。

世界陸上は私、メディアの方で連日、現場に行っておりました。

今回はメディアから見た意見をさせていただきたいと思いますが、本当に5万8千人の会場が連日いっぱい、陸上界において、これまで、ここまで会場に人が入った大会であったり、また、盛り上がった大会というのはなかったのかなと思って、選手の皆様も言っておりましたが、感激をするようなそんな瞬間を繰り返しておりました。まさ

に東京都の皆様、大会事務局の皆様、W N F、そしてテレビ局のプロモーションも含めて、皆様一人一人の力が形になったなと思っております。心から感謝申し上げます。

本当に、ハイパフォーマンスで盛り上がり、そして、会場の盛り上がり、それを、テレビを通じて全国の皆様を広げていくことで、一体となった盛り上がりというのを見ることができたのかなとも思っております。

会場を見てみると、心配していた応援の仕方ですが、本当に世界のトップ応援団といっても過言ではないほどのすばらしい皆様の応援の仕方というか、ルールなども含め、皆様の応援だったなと思い、感激いたしました。

そして、デフリンピックなのですが、デフリンピックでは、私自身も視察や応援に行かせていただきました。デフリンピックスクエアでは、新しいテクノロジーとスポーツの連携があって、デフリンピックのためにつくられたテクノロジーが社会に役に立っているものであったり、社会に向けて発信されたもの、つくられたものが、デフの人たちにとって、非常にプラスになっていたり、そういった新しいものにふれあうことができ、すごく貴重な体験をさせていただきましたし、このスクエアにも、非常に連日多くの人たちが足を運んでいて、皆様の盛り上がりがありました。水泳、バレーの会場にも行きましたが、最初に小淵委員がおっしゃったように、予想以上の入場者数ではなかったのかなというぐらいに長蛇の列があり、私の友人は、1時間待っても入れなかったと、次のときは、さらに長く待つほど並んでいたのが印象的でしたね。それを含めて、すごく残念だったのは、こんなに会場は盛り上がっているのに、社会の人たちが、どれだけデフを知っていたのか、全国の中で広がっていたのかなと、もちろん、ニュースの中では、今デフを開催しているのだというものは、感じていたとしても、なかなかこう、では、どの選手がどういうふうに、といったことまで伝わり切れなかったところが、もう少しもったいなかったというような、そんな感想ももちろんありました。

この二大会の経験をこの後、どうつなげていけるか、継続できるかが、ポイントだと思います。上代さんと、私は意見がすごく同じで、まさに言おうとしていたことなのですが、応援では、二つの意見と一つの課題がありました。一つ目の意見は、誹謗中傷といったものの応援の仕方というものが少しずつ広がってきたところ、会場にも誹謗中傷ポスター、中傷廃止ポスターみたいなものが、いろいろなところに掲げられていて、そういった認識が、皆様にすり込まれていくところが、非常に多いというのを感じたとともに、そういうのが、また、SNSなどを通じて、より広がっていければよいなと思

っております。

二つ目の意見は、応援の一体感ですね。これは、デフリンピックのときに、すごく感じたのですが、サインエールはもともと手話でない手話を、サインエールとして、新しくつくったエールを、日本の方だけではなく、海外の方々も会場で一生懸命されて、応援をしていて、応援している皆様が、応援をすることで楽しめる空間を、何か仕掛けをつくるということも、これからは、大切なのかなと思います。サッカーの観戦に行くと、サポーターの皆様が、非常に盛り上がっていて、やはりそこに非常に一体感を感じることがあるので、応援の仕方を誘導したり、仕掛けを作ったりって、皆様に楽しんでもらうことも、一つかなとも思いました。しかし、一番の課題は、やはり応援が打ち上げ花火のようにそのときだけ、一時的なもので終わってしまうのが、課題だと思っています。これを機に、この選手をより応援したい、この競技をより応援していきたいということを、続けていけるようにしていくことが、大切なのかなと思います。なので、例えば目にする機会を増やすことによって、興味を継続できることもあると思うので、今回出た選手が、この後、どんな試合があるのかということをお知らせするような場所をつくってあげるなど、ここに来た人たちが、その後も応援を続けられるようにする、何かここも仕掛けが必要なのかなとも思いました。

また、先ほど上代さんもおっしゃったように、1回でこのスポーツの熱を切らさないように、東京世界陸上、デフリンピックの経験だったり、知見をデータ化したり、その後の人たちもそれを引き継いでいけるような形に是非していただければなとも思っております。

もちろん、この東京世界陸上やデフリンピック、そして、東京都スポーツ推進総合計画も含めて、どういった影響があったのか、年代別、性別、地域別など、データを取っていただいて、分析して次につなげていただければと思います。

長くなりましたが、私からは以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。

非常に多岐にわたって貴重なご示唆をいただきました。応援を、サインエールを自分たちでつくって海外の人に広まっていったというのは、非常に象徴的でありまして、応援の仕方が楽しみをつくっていきながら広げていくという方法はあるだろう、とのご指摘は非常に重要でしたし、そのためには、目にする機会をどんどん応援し続けられるような仕組みをつくるべきだというご示唆をいただきました。最終的に、それを反省的に

ちゃんと見られるようにデータ化をしながら、見える化を進めていくべきだというご示唆もいただいたところでございます。ありがとうございます。非常に貴重なご意見でいただきまして、ありがとうございます。

それでは、お待たせして、すみませんでした。ゼッターランド委員、お願いします。

○ゼッターランド委員　ゼッターランドです。

今回のこの推進総合計画の策定に当たりまして、一緒にほかの委員の皆様方と携わられていただき、また東京都の本当に多岐にわたるエリアをカバーする推進総合計画は、それをまとめていかれる作業は非常に大変なものであったかと思います。そこにご尽力いただきましたことを改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今回、世界陸上とデフリンピックが東京で開催されたということで、連日、私も東京にいる間は世界陸上を視察させていただいたり、テレビ等々の報道でその熱狂ぶりを見させていただきまして、デフリンピックに関しましても、終了したばかりですが、たまたまバレーボールの監督が知り合いということもありまして、ネットニュースでアメリカに現在来ているのですが、非常に盛り上がっていたということで、また過去最高の数のメダルも獲得できたというニュースも聞いて、非常にうれしく思っております。本当は現場でそれが見られたら、よりその熱さを体感できたのではないかと思うと、少し残念なのですが、ネットを通じて、その熱狂ぶりがやはり伝わってきたので、そういった点では、100周年ということで、東京でデフリンピックが開催されたということは、非常に私も個人的にとてもうれしく思っております。

世界陸上を視察させていただいたときに、先ほどいみじくも二條委員がおっしゃっていたのですが、実は、私もどのようにバリアをつくらぬようにとか、一緒に体感できるようにということで、座席の話がありましたが、二條さんともご一緒させていただいたときに、実際に上からいろいろ見させていただく際に、何かもう少し話ができたらよいなと思ったときに席が離れてしまったので、少し残念に思っていたのですが、そのときに、私自身が、もしかしたら逆に本当にそちらに伺って、一緒にお隣に座ってよいのかなって、自分で、何で遠慮してしまったのだろうと少し思ったこともあったのです。例えば席の優先など、そういったことも大前提なのですが、もしかしたら、自分の中で知らないうちに、何か変な遠慮をしてしまっていたり、これはもう少し自分で考えて、そうしないほうがよいのかななど、何かそういう考えを何かつくってしまうことを、やはりやめたほうがよいのではないかという、これは、全く個人的なことなのですが、

やはりこういう例えば一緒に視察をするなど、あるいはデフリンピックなど、こういった大会が開催されたときに、それまで自分は気がつかなかったことなど、これでよいのかな、いや、思い切っても、壁を越えていってもよいのではないかという、あるいは逆に壁を自分でつくってしまっているのではないかということ、気づかされる大会の開催というのは、いろいろなところで、そういうことを気づきのあるもの、きっかけになるのが、こういう大会だと思うのですよね。何をもって成功とするかということ、先ほど来から会長が、おっしゃっていたのですが、観客数が非常に多くて、チケットの売上げがよくて、メダルがたくさん取れてなど、いろいろな観点はあると思うのですが、その大会を開催することによって、課題が見つかる。その課題をどう今後解決していくかということが見つかった、そういうことも大会の実施したことによかったこと、成功と言えるかどうか分からないのですが、よかったことになるのではないかなと感じながら視察をさせていただきました。

それで、いろいろ課題というのは、これからもやはりあることなのですが、私自身はこういった大会など開催されたときに、過去と比べて、非常にやはり格段によくなったこと、問題点もありますけど、そのテクノロジーの発展ということが非常に大きくスポーツを広めていくことにも、推進する上でも非常に大きなやはりツールとなっているのだと思うのですよね。そのツールの使い方を誤らないように、やはりどうしたらよい形でそのツールを活用して、より一層そのスポーツの発展など、普及に寄与していけるかどうかという、その発信の仕方をまた考えていくというのも今後一つの課題でもあるのかなと思います。

それで最後に、先ほど上代委員、それから高橋委員からもあったのですが、大会を開催したということ、開催に当たって作り上げられていったことが、やはりどのように今後継続していくかということが一つの課題でもあると思いますので、それをいろいろな形で検証しながら、継続できる方向を、また探していければと思っております。

以上です。長くなりました。失礼いたします。

○松尾会長 ありがとうございます。

非常に貴重なご示唆を富んだお話をいただきました。ありがとうございます。

それでは、今日、ご欠席の新島委員のコメントにつきまして、お預かりをしているところがございますので、平野課長から少し概要的で結構かと思いますが、お話をいただければ有難いと思います。よろしく申し上げます。

○平野スポーツ総合推進部企画担当課長 それでは、新島委員のご意見、読み上げさせていただきます。

まずスポーツ推進総合計画についてですが、今回の計画は、計画の柱にウェルビーイングの考え方を据えたこと、「する・みる・支える」の入り口として、新たに「応援する」を加え、より幅広い楽しみ方や取組方法があることを示したこと、eスポーツの普及を明記したこと、達成の数値目標を明示したことなど、そういったことで東京の新たなスポーツ振興の方向性を示すことができたのではないかと考えています。

この計画について、今年6月に開催された全国スポーツ推進委員連合の総会の場で紹介するとともに、46道府県の会長及び帯同した事務局にも計画書を配布し、計画のポイントを説明しました。冊子のボリュームや時間の関係から説明の行き届かなかったこともありますが、東京ならではの計画であり持ち帰って県の計画づくりの参考にしたいといった声をたくさんいただきました。冊子を提供してくださったことに改めて感謝申し上げます。スポーツ推進委員についても位置づけや役割などを記載いただきましたので、知名度の向上、新たなスポーツ推進委員の確保につながるものと期待しています。

また、都内のスポーツ推進委員及び関係行政職員を対象として実施した広域地区別研修会（通称：ブロック研修会。島しょ部を含めて全 11 ブロック）において、この計画について尋ねたところ、関係行政職員も含め、各会場とも知らない者がほとんどという状態でした。新たな計画ができたこと、この計画は区市町村のスポーツ推進計画の参考となるので必ず目を通してほしいこと、計画のポイントなどを説明して周知を図りました。また、スポーツ推進委員以外の方も参加した初級パラスポーツ指導員講習会でも情報提供を行いました。スポーツに関わる多くの人に見てもらえるよう願っています。

今後の課題としては、ブロック研修会での情報提供で分かったことですが、計画の周知をどのようにしていくか、大きな課題であると思います。どんなに良い計画を作っても見てもらえなければ無いのと同じです。特にスポーツ推進部署の区市町村職員には、異動もあるため継続的に説明の機会を設けるなどして周知していく必要があると思いました。

次に世界陸上についてでございます。視察を通じて感じたこととして、小学生がアスリートと同じトラックで、計測機器を使って 42.195mの徒競走を行う取り組みは、子どもたちのスポーツへの関心を高めるよい機会になったと思います。走った後、全員で記念写真を撮っていましたが、背景の大型モニターにその学校名とクラス名が表示され

るという気遣いもありました。素晴らしい取り組みで、子どもたちには一生の思い出になったと思われまます。また、会場周辺で行われていた様々な取り組みを拝見し、この大会はトップアスリートだけのための大会ではなく、大会を契機として、環境問題への取り組みや新たなスポーツ文化の創造といった、東京都のスポーツに対する考え方を見える形で表現した大会であったという印象を持ちました。会場周辺で楽しむ家族連れも多数見られ、こうした大会の新しい形を見たように思いました。

最後にデフリンピックについてでございます。東京都スポーツ推進委員協議会では、今年初め、東京都スポーツ文化事業団デフリンピック準備運営本部のご協力をいただき、東京2025デフリンピックの概要及び準備状況などについて研修会を行いました。区部のスポーツ推進員と関係行政職員、市町村部のスポーツ推進委員と関係行政職員を対象として、多くの推進委員が参加できるように日程を分けて開催し、理解を深める機会を持ちました。今年度のブロック研修会でも複数のブロックが、デフリンピックやスポーツを通じた共生社会の実現をテーマに取り上げました。10月には東京都との共催で、ろう者の文化やろう者との接し方などを学ぶ研修会も開催しました。日本語と日本手話とは異なる言語であることなどをはじめ、新たな気づきの機会となりました。デフリンピックがなければ、こうした取り組みもしなかったのではないかと思います。

大会の視察をさせていただいた際に、東京体育館内の随所で、視覚で情報を伝えるための施設整備が行われていました。2階席と3階席の間には電光掲示板が設置されており、開会あいさつや来賓あいさつが英語と日本語で表示されました。大会のための仮の設備のようですが、これを機に本設されることを願います。非常口やトイレ内にも光で伝える工夫がされていて、バリアフリー化が進んでいると思いました。また、デフリンピックスクエアでは文化・技術発信エリアで「みる Tech」が開催されており、最新技術を使ったさまざまな取り組みが紹介されていました。こうした技術がより身近なところでも利用できるようになることを期待します。さらに、オリンピック・パラリンピックと異なり、各国の選手も来場者とともに各エリアでくつろげるようになっていました。トップアスリートを身近に感じることができ、家族連れでも楽しめる工夫もされていて、素晴らしい取り組みだと思いました。多くの人が手話で楽しそうに話している姿を見て、自分も手話ができたら、もっと多くの人と交流できたのではと、少し悔しい思いをしました。手話の普及に取り組んでいる自治体も複数あります。共生社会の実現に向けて全都での取り組みが進むことを期待します。

以上でございます。

○松尾会長 ありがとうございます。

それでは、延興副会長から、コメントをいただければと思います。お願いします。

○延興副会長 デフリンピックについてでございます。

私、日本ろうあ連盟のデフリンピック運営委員会の委員をおおせつかっておりましたが、実際行っていたことは、本番のときに全競技19会場を駆け回って、泣いたり、応援したり、笑ったり、楽しませていただいただけでございます。実際、招致、計画の段階から本当に努力を積み重ねられた東京都の皆様から心から成功ありがとうございますと、お礼を申し上げたいと思います。

また、塩見委員におかれましては、大変謙虚なお人柄であり、また、ここでの立場がスポーツ協会の理事長ということで、あえてお話にならなかったのだと思いますが、もう一つのお役目である東京都スポーツ文化事業団の理事長として、実際の競技会場等々、全ての運営の責任を担っておられたということで、本当に成功おめでとうございます。本当にありがとうございました。

本審議会との関係で言いますと、まさに世界陸上、またデフリンピックの成功というのは、前期の計画期間に行ってきたこと、特にオリパラなどを経て、そのレガシーをしっかり積み重ねるということを受け継いで、これまでの都の取組の結晶のような成功だったなと思っております。実際は両方の会場に行きましても、オリパラで頑張っていた職員が、今度は、世陸やデフリンピックを支えて、そういう運営など盛り上げのノウハウ、また、社会的にはパラスポーツへの関心の高まり、ボランティア気運、また企業がこういうものを応援したいという気運の高まりなど、積み重ねてきたことがここに結集したのかなと思います。

また、先ほどからサインエールの話がありましたが、応援するという、今年スタートするこの計画の最大のキーワードがこんなに発揮された、パワーを見せつけた大会というのは今までなかったかなと思ひまして、この6年の経過期間のスタートにふさわしい大イベントであったかなと思います。

私、個人的には今回のデフリンピックで一番印象に残ったのが、全国のデフコミュニティの方の力と言いますか、今回初日にバレーボール会場など人があふれて、びっくりしたわけですが、私が読み違えていたとすれば、こんなに全国のデフ社会の方が東京に殺到するとは思っていませんでした。実際いろいろ話しすると、スポーツファンでもな

ければ、親戚が出ているわけでもないが、初めて自分たちの社会に脚光が浴びたことで、地方のおじいちゃん、おばあちゃんが、バスを連れて行ってきて、よく分かんないけど、大喜びで応援している姿というのでもありますし、また、世界のデフアスリートが集まって、手話どうしですぐ仲良くなって、これが、マイノリティである聴覚障害者の方が連帯するすごいお祭りなのだなど感じるとともに、スポーツでこれだけの連帯が生まれる、コミュニティをつなぐスポーツの力というのを、本当に実感いたしました。さらに今回すばらしかったのが、今までの恐らくデフリンピックが、聴覚障害者だけの閉じた大会であったものが、まさに先ほどお話がありましたけど、聞こえる人も、聞こえない人も一緒になってサインエールで大応援をしているという状況をつくりだせたことというのは、やはり東京都、またはスポーツ文化事業団さんのすごい努力の結晶だと思いますし、ここをスタートに、いろいろなことを行っていけたらすばらしいと思います。

これからの6年ですが、やはり先ほどから、これを続けるのは大変だということがありました。私は、これ永久革命だと思っておりまして、日本人は、すぐに忘れますので、定期的に何か仕掛けていくしかないと思います。そういう意味では、来年の愛知のアジアパラもありますが、是非東京でいろいろなパラスポーツの世界大会など、どんどんやることによって、支えたい意欲、みたい意欲、応援したい意欲というのを維持、発散する場を提供していることが、すごく大事なのかなと思います。また、先ほど応援するから始まるというすばらしい、まさにこの計画期間を象徴するお言葉だと思うのですが、やはりそこであの競技を見て、スポーツをやりたいと思った方が、スポーツを選んでやれる、そういう環境をつくること、「応援する」からぐるっと回って、原点の「する」に戻っていくのが、この計画期間のテーマなのかな、などと、先ほどから感動して聞いておりました。

最後に一言だけ。もともとデフリンピックをやる、やらないといったときに、私、夢がありまして、競技会場が盛り上がるのは、もちろんですが、是非外国のデフの選手に東京の中、うろうろして、みんな、どうしよう、言葉も通じませんって驚く東京都民をみるのが夢だったので、先ほどの内山先生の歌舞伎町で手話があふれていたことが、私のドリーム・カム・トゥルーでありまして、感動いたしました。ありがとうございました。

○松尾会長 ありがとうございました。

本日は総括といたしまして、各皆様方からコメントをいただき、恐らく早く終わるだ

ろうと思って予測しておりましたが、皆様方の熱き思いで、会議終了の時間が近づいてきたところでございます。

私も最後に一言だけ少し総括をさせていただければと思います。

この第29期のスポーツ振興審議会では、これからの東京をどのようにスポーツを支えていくのかということの構想において、推進総合計画を皆様方で立てていただいたわけで、議論いただいたわけございまして、この2月に小池知事に答申をさせていただいて、3月に実際に計画が改定をされたという状況でございます。

幾つかの改定の柱がございましたが、中でもこれからは、量だけではなくて、質というものをどう我々は担保できるのかという議論だったかと思います。そこの行き先に幸福感やウェルビーイングというものをしっかりと想定しながら、みんなが幸福感を感じるものでなければ、スポーツの価値というのはやはり高まっていかないだろうというような話になっていたわけでございます。

そこでこの6月に、ご存じのようにスポーツ基本法が改正をされました。その中でも、今までうたっていなかった幸福の享受やウェルビーイングが示されることになったところでございます。

また種目の拡大も、私どものところでは議論になりました。そのときに、eスポーツをどう扱うのかを議論いただいたところございました。eスポーツそのものをスポーツとして認めるという立場ではなくて、ただ、eスポーツの価値というのは非常に高いものがあるので、それを最大限活用しましょうということで、まとめていただいたところございました。これもスポーツ基本法の改正におきまして、情報通信技術を活用したスポーツの機会の拡充が明記されたところでございます。そういった意味では本計画が3月、スポーツ基本法の改定は6月ということでございまして、本推進計画はフロンランナーとしての働きをもったのではないかと考えております。

また、先ほどから皆様方にいろいろお触れいただきました「応援する」ということを、文化としてきっちり根づけましょうということが今回の大きな推進計画の柱にもなりました。「応援する」が、これからのスポーツ文化の一番先端をつくっていく文化になるのではないかと、皆様方にも、今日、お話をいただいたところございました。

量から質へ、そして、スポーツを通じたウェルビーイング、あるいは「応援する」とい新しい文化、あるいは情報機器を活用したスポーツの活用で、新しいソフト、ハード

面についてのご議論いただいたのが、今回の推進総合計画に反映をいただいたということでございまして、改めてこの計画の策定にこの29期、皆様方に関わっていただいたことに心から感謝申し上げますところでございます。本当にありがとうございました。

そして、実はこの3月に計画が改定され、7か月がたつところでございまして、これから本番ということになっておこうかと思えます。例えば、チャットGPTをはじめ、生成AIという言葉はご存じかと思えますが、お使いになったことはございますかと、学生に聞いたところ、ほぼ100%使っており、2、3年前まではそんなものは使っていけないと言われていたものが、今はどううまく活用するかという時代に、この2、3年で変わってしまいました。このように、あっという間に変わっていくということもありますし、逆に言えば、別な言い方をすれば、このデジタル化の促進の中で、もしかするとeスポーツの考え方を、もう一ひねり、二ひねり考え方を変えていかなければいけない可能性はないでしょうか。それだけでは、ありません。最近、天候でいうと、ゲリラ豪雨があるという話から、最近、線状降水帯になり、いまではそれが普通になりました。また、40度は大変だと、人が生きていけるのかと言いながら、最近40度でも普通に受け止められます。これはまさに2、3年の話でございまして、これから恐らく40度の中であって、子供たちは日中スポーツをさせてよいのかという問題も大きな問題になってくる話ではないでしょうか。あるいは子供たちの少子化の問題の中で、一番今大きくホットな議論として、昨日も国の検討会が行われましたが、学校の部活動の地域展開をどのように進めるのか、これは、もう待たなしのところまで来ております。そういった意味では、これから時代というのは、恐らく、今回6年の計画ですが、長くより続くだろうという時代ではなくて、2、3年のうち、ばらばらと変わっていくようなことを、私どもは想像しながら、この計画を常に進捗を確認しながらも、新しい考え方もしっかりと入れながら、行っていかなければいけないということになるかと思うところでございます。変えてはいけない理念、全ての人たちが、スポーツで生きる喜びを感じる社会、そして、変えなければいけないこと、社会状況はどんどん変わるので、それにどう我々は、対応できるのかが、これからのこの審議会にも課された課題になるのではないかなと感じております。

本期は、本日をもちまして終了ということになります。委員の皆様方におかれましては、この間、この推進総合計画の立ち上げから、見守りまで、そして、これから、また、いろいろな動きが出てまいりますので、大所高所から見守りをいただければ有難い

と思います。本当にどうもありがとうございました。

それでは、本日の議題といたしましては、ここまでということにさせていただきたい  
と思います。どうしても、この一言だけは言っておきたいということがございましたら、  
ご発言をと思いますが、いかがでございますか。

よろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは、以上で本日の議事は終了したいと思います。本日が、委員として最後  
のお務めをいただきました方がいらっしゃいまして、3名いらっしゃいますので、その委  
員の皆様方から一言ずつだけ、ご挨拶をいただければ幸いに存じます。

まず水村委員からご挨拶をいただけますか。本当にありがとうございます。

○水村委員 4期8年務めさせていただきました。最初スポーツ振興審議という委員をお  
おせつかって、あまりスポーツを本格的にやったことがないのに、大丈夫かしらと思  
いましたが、本当にこの8年間、ラグビーワールドカップ、オリパラ、そして、その後パ  
リのオリパラもあって、世陸があって、今回のデフリンピックという、非常においしい  
8年間を委員として過ごさせていただきました。その中で、私はダンスという一つの芸  
術活動をしてきましたが、大学で学生に教えたり、あとは子育て中の母として、ある  
いは女性のスポーツ参加ということで、私自身、いろいろ学ばせていただいて、今までス  
ポーツというものに、私は少し離れたところにいるなと思ったのを、インクルードして  
くださったのがこの委員かなと思っております。

最後に、東京都のスポーツ推進に関わる皆様には、本当に丁寧にサポートしていただ  
いて、少しトゥーマッチかなと思うぐらい、しっかり働いていただきまして、是非、皆  
様の健康とウェルビーイングを、今後少し考えていただいとというのは、やはりここ  
から発信する場合には、その方たちの背中で語るどころもたくさんあると思います。私  
自身も、高齢期に入りながら、あまり暇になれません。なぜかと言うと、健康の話などを  
授業でしたり、自分も研究したりしていますと、あの先生の言っていることと行ってい  
ることは違うのではないかとと言われると困るので、是非、東京都の皆様健康とウェ  
ルビーイングを、推進していただきたいと思います。

本当にどうもありがとうございました。

○松尾会長 どうもありがとうございました。

それでは、宮地委員、ご挨拶いただけますか。ありがとうございます。

○宮地委員 これまでエビデンス、エビデンスと学者面して小難しい話ばかりして、本当

に申し訳ございませんでした。つまらなかったと思いますが、私に与えられた役割という事で、どうぞご容赦いただければと思います。

今日、最後に発言の機会をいただきましたので、エビデンスに基づかない私のスポーツに関する思いを最後に一言だけお話しさせていただきたいと思います。

私、ラグビーフットボールが専門でして、実は今でもラグビーをプレイしております。1か月に2回ほどプレイしておりますが、非常に健康によくないスポーツで、けがばかり、たまに鼻が曲がっていたりなど、びっこを引いて授業したりなどしている次第であります。ただ、このラグビーがないと、恐らく、審議会でも過激な発言したり、教授会でも何か物議をかもす発言をしてしまうのではないかとということで、私の人生にとって、大変欠かせないものとなっております。健康に悪かろうが、何だろが自分がやりたいことをやる、それが本当はスポーツの本質でありまして、私が今まで発言したことと本当に違うことを最後に言って申し訳ないのですが、これもスポーツの側面の一つとさせていただければと思います。ねんりんピック、29期の成功をお祈りしておりますが、驚いたことにラグビーフットボールが競技でなくなっているということで、私、目指していたのですが、仕方がないので、健康マージャンに挑戦しようと思っております。

また、早稲田にお世話になって5年、実は原委員と非常に関係しておりますが、早稲田の駅伝チームの科学的サポートさせていただいております、花田監督と一緒に25人の部員全員が、2日、3日に、誰でも走れるような前向な状態で、ウェルビーイングの高い状態で箱根駅伝に臨めるようにという支援を、1年半行ってまいりました。是非、原監督、2日、3日はおてやわらかに、どうぞよろしく願いいたします。

以上です。ありがとうございます。

○松尾会長 ありがとうございます。

○松尾会長 どうも、ありがとうございます。

最後にゼッターランド委員、本当にありがとうございます。今日もアメリカからご参加いただきまして、ありがとうございます。ご挨拶をお願いします。

○ゼッターランド委員 本日はありがとうございます。

月日が過ぎるのが、本当に早いということをつくづく最近実感しております。これまで本当に大変お世話になりました。ありがとうございます。

元アスリート、そして今スポーツの現場に携わっている者として、好き勝手な意見ばかりを言っている中で勝手なことを言いつつ、皆様が本当にいろいろサポートしてくだ

さったり、またその意見を反映させていただいたりと大変感謝しております。

また、それぞれのスポーツという一つのことを軸に、ご専門の分野の先生方、委員の先生方のお話を会議のたびにお聞きしながら、そういう観点からこういう考え方もあるのだ、こういう切り口もあるのだと、非常に多くのことを学ばせていただきまして、いつもスポーツをど真ん中に置いている人間としては、ときどきつい入って行ってしまいがちなところを、そういった視点を広げてくださるような、視野を広げてくださるようなご意見をたくさん伺わせていただくことができ、大変、私自身も勉強になります。本当にありがとうございました。

今アメリカでまた現場に戻りまして、今度はプロの選手を相手に、日々どうやったら指導がちゃんとできるのだろうかと思っておりますが、アメリカであっても、スポーツが解決できる社会課題がやはり同じようにあって、そして、そのスポーツが人にもたらすこの幸福感というの、同じようにやはりあるのだなと、悩みも同じ、スポーツに対する熱い思いも同じということをごちらに來ても感じております。

今後も何か日本のそのスポーツ発展のお力に微力ながらなれるように、こちらでも、研さんを積んで帰りたいと思っておりますので、またご一緒できる機会がありますことを楽しみにしております。本当にこれまでありがとうございました。

○松尾会長 どうも、ありがとうございました。ますますのご成功を祈念しております。

それでは、進行をこれから事務局にお返しをしたいと思います。よろしく願います。

○石原企画調整担当部長 本日はお忙しい中、貴重なご意見を頂戴し、本当にありがとうございました。

本日いただきました意見につきましては、今後のスポーツ施策にしっかりと役立ててまいりたいと思っております。

本日を持ちまして、第29期のスポーツ振興審議会は終了となります。これまでの間、様々な貴重なご意見等いただきまして、本当に御礼を申し上げます。どうも、ありがとうございました。

以上を持ちまして、終了となります。どうも、ありがとうございます。

午後5時14分閉会